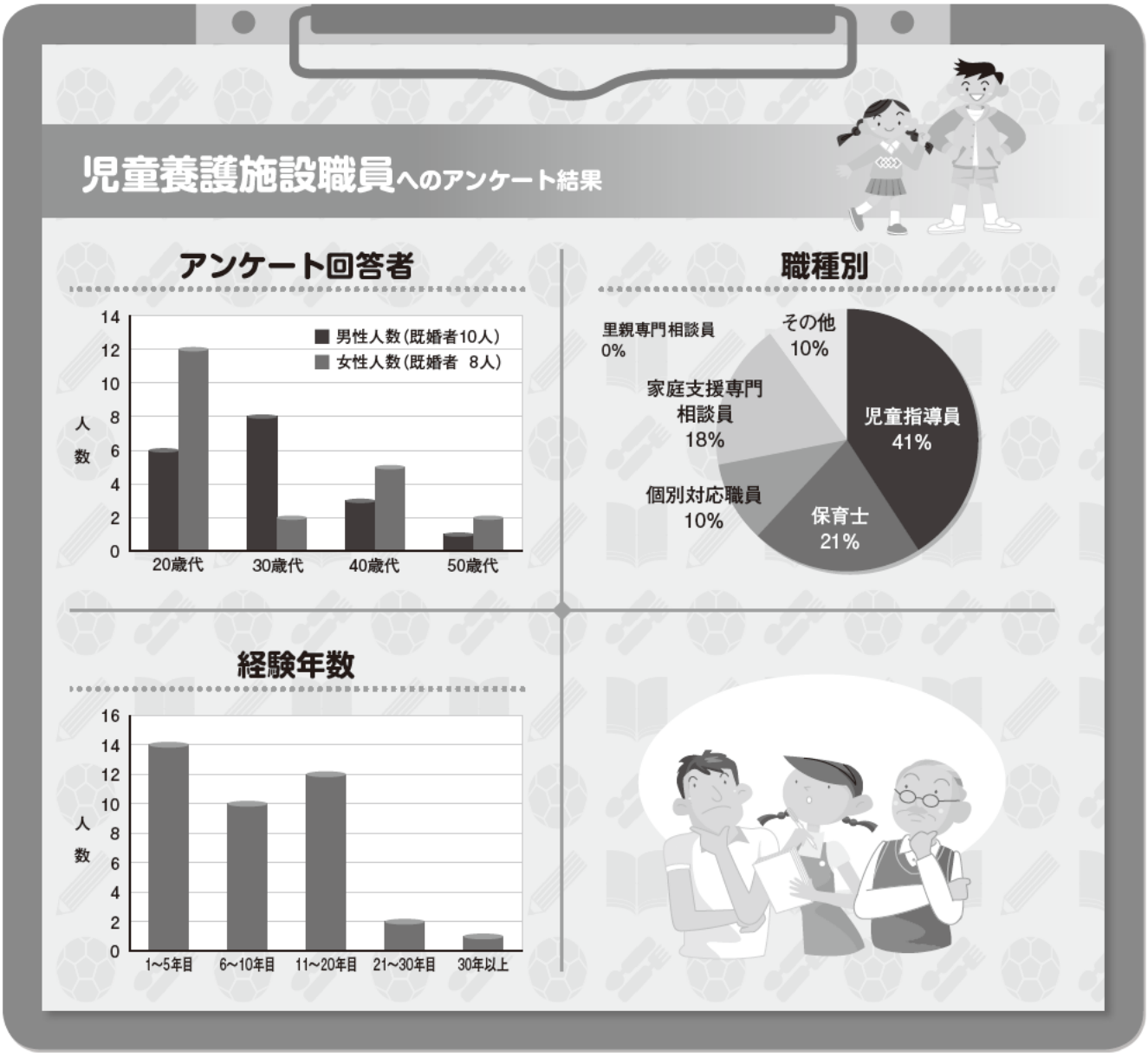
愛着形成における取り組みアンケート

～児童養護施設と乳児院で働く職員にアンケート～

特集係は「要保護児童の愛着の絆を取り戻すために」というテーマで前回から専門家の先生方や施設出身にお話を実際に伺ってきました。今回は朋の編集担当職員だけでなく、実際の現場で児童と向き合っている職員に意見を伺おうと考えて児童養護施設職員と乳児院の職員に「愛着形成における取り組み」についてアンケートしました。



QUESTION 1
施設としての取り組みは？

工夫していること

- 施設が安心できる環境になるように個別的な支援をしている
- 担当職員が孤立しないように声を掛けるなどチームで対応する
- 担当制を取り入れて大人（担当）との関係を積み重ねる過程で子どもたちが大人に対して安心し、愛着や信頼関係をより形成しやすくなるような支援を心掛けている
- 必要に応じて、心理職や個別対応職員の個別支援を実施
- 心理職の意見も踏まえ、日常生活で子どもの興味を引き出し担当と子どもとの時間を意識的に設定する
- 個別の対応を大切にするため、ユニット化している
- アフターケアも含めて、子どもが求めてきた時、必要に応じて生い立ちの整理を行う
- 月に1度の担当面接、家族体験行事、習い事
- どの児童にも平等に関わる
- 曖昧な返事をしない、目を見て話すようにする
- 認める、褒める支援を心掛ける
- 家庭的な対応

現状と課題

- 担当だけでなく、FSW、個別対応、心理職が生活の場から離れた場で面接をし、アドバイスを行っている
- 担当職員に負担を1人で背負わないようにチームで支援に努める
- 児童の誕生日には児童と担当職員が一緒に外出する
- 親子や家族関係の整理を行い、個の課題と軸となる基盤作りを行う
- その子にあった対応方法を考える
- 生い立ちの整理を行う、大切にされていると感じられるようにする
- チームとして支援ができるように施設間で情報の共有をしている
- 担当制を取り入れ、愛着対象をはっきりさせ、個々の関係をよりしやすい環境にする
- 愛着形成が未熟な子には整理整頓が苦手な子が多いように感じる
- 社会経験の乏しさから衣食住が施設でできることが当たり前になり、不満を口にする子もいる
- 児童によって関わりが多い児童や少ない児童がある
- 勤務時間外での対応がある
- 経験年数によって差ができることや個々のスキルが足りていない
- 子どもの制限のない甘えや攻撃的な言動による関わりへの理解
- 低年齢児には必要だと思うが、ある程度の年齢になると愛着の再生が難しい
- 問題が表面化していない児童の関わりが手薄になってしまう
- 口が悪い、嘘をつく児童が多い

QUESTION 2
担当としての取り組みは？

- 興味や関心のあることを共有する
- 認めることを多く行う
- 環境（衣服、持ち物、通院）などを丁寧に対応する

工夫していること

- 担当として見守っていることが分かるように声掛けをする
- 関わりの中で変化に気付けるようにする
- 適度のスキンシップを持つこと
- 成育歴や発達段階を見極めて児童と関わる
- 担当児童の身の回りのことを丁寧に行う
- 交換ノートなどを活用している
- 大切な存在であることを念頭に子どもの変化にはフィードバックする
- 子どものことを知っている気にならない。自分が知っていることは一部でもっと知ろうとする気持ちが大切
- 子どもの気持ちや意図を汲み取るように努める
- まずは子どもと向き合い、話を聴くこと
- 児童と一緒に運動や作業などをする機会を活用し、1対１の関係性の強化を心掛けている
- 帰省ができない児童に対しては職員が家庭体験事業を実施
- 子どもの意向を確認し生活環境を整える
- 基本的には長所を認め、伸ばすことで自己肯定感を高められるような支援を心掛けている。その積み重ねにより子どもが相手の気持ちを考え、理解できるように努めている
- 適切な距離を保ち、子どもの意見、意志を尊重する
- 担当制を取り入れず、ユニット担当制をとっている
- 職員の得意な物を通じて1人1人の興味や関心を把握して一緒に取り組む
- 子どもが親を求めているのに動かないケースの親子関係づけに目を向ける
- 児童がどう思っているのかを大切にし、一緒に考えることをしている

現状と課題

- まだまだどの子も自己肯定感が低く、素直な感情を表現できなかったり、相手の気持ちを理解した上での発言等、コミュニケーションが苦手であると感じる
- アセスメントを通じて情報収集と分析、具体的課題を明確にする
- 話しやすく、相談しやすいように日頃のコミュニケーションをする
- 担当制ではないため、できていないことがある
- 個別の対応についてはチームとして共有し、担当職員としてだけではなく、全体として良い評価をしたり、頑張れるように励ましている
- 生い立ちの不明瞭な部分の取り扱いが難しい
- FSW、個別対応職員、心理職に適宜アドバイスがもらえる体制をとっている
- 個別の時間を作ることで、他の職員が負担になる
- 大人への不信感が根強く、思春期、反抗期の時期でもありプライベートに踏み込みにくい
- 担当が変わった時の引継ぎなどが難しい
- 担当が出勤していない時には時間がかかる
- 時間の確保が難しい
- 将来の自立に対するイメージができず、伝わりにくい
- 担当によって意識の高さに違いがある

QUESTION 3
中、高生以上の児童との関わりは？

- 子どもと向き合い、話しを聴くことを心掛けて長所を伸ばすことを心掛ける
- 将来の進路を段階的にイメージできるよう各自の長所やさまざまな職種を日ごろから伝えていく。また、年齢に応じた責任ある行動についてもタイミングを見計らい伝えていくように心掛けている
- 個別での関わりを増やすようにする
- 自立に向けての意識づけをする

工夫していること

- 進路支援や学習支援を行う
- 小学生消灯後に話す時間を作る
- 相談や悩みに大人としての考えや思いを伝える
- 集団で生活している時と、1対1のときの顔が違うので話しをする場所を考える
- 年齢に応じて、生活面や進路などの雑談を交え、相談を通じてアドバイスや一緒に調べ、1人1人にあった将来設計を考えている
- ある程度の考えを持っているため、一緒に考え、自分だったらどうするのか伝える

現状と課題

- 愛着形成が未熟な子どもは相手の短所に着目してしまうことが多いと感じる。その上で相手の短所を指摘し、自分が相手の上位であろうとする言動が気になる
- 受容と共感中心に行うと向き合うことができにくくなる
- 自己肯定感が低く、年齢相応の自己肯定感、社会性が育めていないことが多い。そのため、新しいことを行う時に諦めてしまうことや自信が無く拒否をしたり、すぐにあきらめてしまう
- 叱られるという感情が先に立ってしまい、失敗等を嘘で誤魔化そうとする場面が度々見受けられる
- 学年が進むにつれて部活動、アルバイトなどが忙しくなり、話しをする時間が少なく、短くても濃い時間を作ることが難しい
- 時間の確保が難しい
- 個別で話す場合は上手に場面設定をしなければ向き合うことが難しい時がある
- 施設に自立に向けての設備が少ない
- 職員、子どもが自己確知できる力を身に付ける
- 将来のことを見越して行動できない
- 今の事だけを考えている児童が多い
- 児相と親のパイプ役が大変

QUESTION 4
困っていることは？

- 愛着不全が見られる児童に対して指導を行う中で、適切な愛着関係へとつなげていきたい
- 適切な愛着形成ができていない子どもは相手の言葉を否定的に受け取ったり、感情の起伏が激しく、周囲に対して攻撃的になる傾向が強いと感じる
- 毎日の支援の中でその子自身の課題に対して、子どもと向き合い1つずつ子どもが成長できるように心掛けているが、その過程には当然時間が必要
- 乳幼児期に愛着形成ができなかった子どもに対して、どうやって育て直しをすればよいのか。また、過激な愛情表現を行ってくる子どもへの対応に苦慮することがある
- 入所時期や生育歴、家族関係によって人格や愛着形成をさまざまな障害や課題があり、心理士の意見や個別対応会議などを行っているが、推測に頼ることが多く、対応策には苦慮することが多い
- 虐待などの親元から離れて生活している子どもたちは大人に不信感を抱いて入所している。そのため、愛着形成には時間がかかってしまうことや担当職員や信頼できる職員の離職に伴い子どもの生活に乱れが生じてしまうことが問題
- 周りのサポートしてくれる職員がいるからこそ愛着形成の積み重ねができると思っている。小規模グループケアになったことで、中舎の時よりテンポよく連携が取りにくい
- 職員を児童が「自分の担当だ」と思って特別意識を持つことが、愛着形成の始まりである。しかし、職員が安全な存在なのか、児童の確認作業がスタートする。そこに感情コントロールの乏しさも交わり、過度な試し行動や感情表現をすることがある。児童にとって特別な存在だからこそ、その表現は時にかんしゃくや暴力の形で表してしまう。その時期を一番近く取り扱うことで愛着形成へとつながっていくと考える。しかし、職員の負担も大きいため、職員のサポート体制がないと対応は難しい
- 中高年齢児は愛着の再生は難しい

- 外泊や引き取りが多い児童に対しての職員の立ち位置と本児との距離感が難しい
- スキンシップなどの距離間は難しい
- 異性との関わり方が難しい
- 担当と相性が悪い時は、他の職員と関わりを持とうとしてしまう

QUESTION 5
その他

- 子どもたちの健やかな成長には愛着の形成が必要不可欠だと感じる。より、適切な愛着形成の実践例を活用した研修に参加したい
- 施設職員は勤務体制やストレス等で離職率が高いと感じる
- 職員が長く続けられる環境をを整えることが大切
- 最近は一時保護児童が長期化する傾向があり、アセスメントを踏まえて上での対応が必要だと思われる
- 職員と児童間での愛着の再生も必要だが、いかに親と子のつなぎの再生をコントロールすることが求められている部分では難しいと感じている
- 施設職員の人材確保や一部職員への負担が多い

アンケートをまとめてみて

子どもが成長する上で愛着は不可欠です。施設入所する児童の多数が家庭環境などから愛着形成が未熟な子が多く、言葉を否定的に受け取る子、感情の起伏が激しい子、嘘をつく子、整理整頓が苦手な子が多いように感じます。

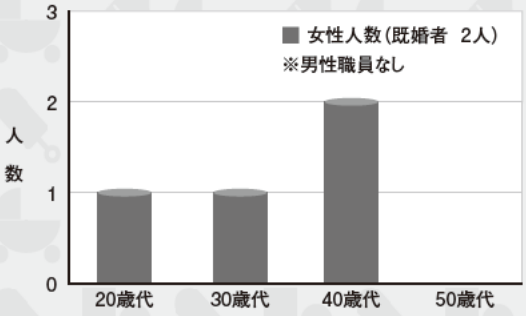
職員は日々の忙しい業務、支援の中で、児童の愛着の形成（再生）に尽力していることが容易に分かります。

愛着を再生（形成）する上で、各施設ごとに大舎、中舎、小規模などの施設形態違いや担当制等の違いはありますが、大人との1対1の時間を児童と共有するように工夫されています。例えば、担当制を取り入れ、愛着の対象を決めること、誕生日に一緒に外出することや、1対1で面談する時間を確保すること、必要に応じて、心理士や個別対応職員が面談など意図的に時間を作るように工夫していることがアンケートからも分かります。担当として取り組みは、衣服や学校の持ち物準備、通院など当たり前のことを丁寧に行うこと、子どもと向き会い、子どもの意図や気持ちを汲み取れるように話しを聴くことや長所を認め伸ばすことです。また、入所年齢が高い児童には、アプローチがしにくい、将来の進路を段階的にイメージできる話しをすることや子どもの興味のあることや長所を肯定することです。一緒に作業や行事など通じて時間を共有することで高年齢の関わりを深めるなど、日常の生活で意図的に話しをするように支援している回答が多くありました。アンケートを通じて、子どもと1対1の関わる時間が少ない、勤務外での対応がある、対応が難しい児童への対応の仕方やスキンシップの取り方、勤務体制などさまざまなことで問題を抱えていることが分かります。担当が児童と1対1で関わる時間を増やせるようにするとともに、1人で抱え込まずにそれぞれの職種や職員が協力することや、職員がチームとして児童にアプローチしていかなくてはならないと感じました。そのために職員が辞めない働きやすい環境は必要です。また、何かあった時に関わる時間を増やすのではなく、日常からの何気ないやりとりが愛着形成にはとても大切だと思います。アンケートからは、親と子のつなぎ（再生）についての意見もあり、今後も課題とされていくと思われます。

アンケートに答えていただいた多くの施設、職員さんはお忙しい中ありがとうございます。皆さんのアンケートが何かの足掛かりになれば幸いです。

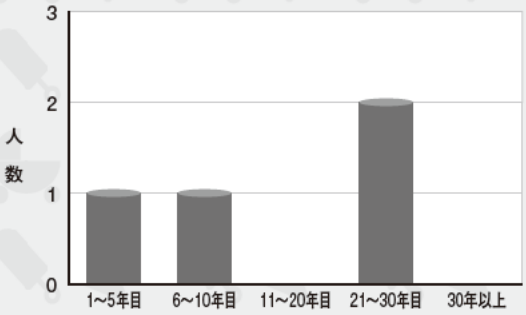
乳児院へのアンケート結果

アンケート回答者

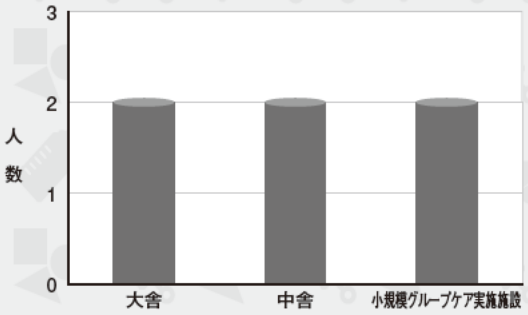


職種別

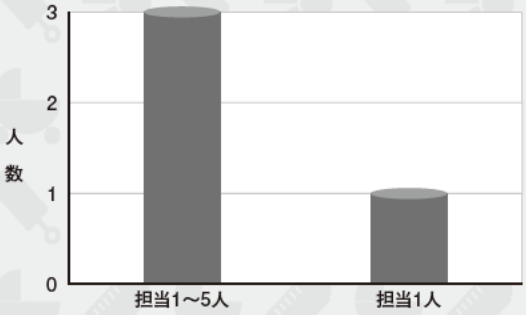
経験年数



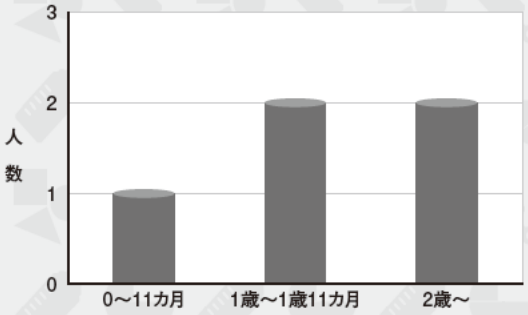
施設形態



担当児童数



担当児童年齢層



QUESTION 1
施設としての取り組みは？

工夫していること

- 個別対応や分散保育などで個別に関わる時間を設けている
- 個別対応職員を配置。担当と共に1対１で関わる時間を設けている
- 全国乳児福祉協議会の「乳児院養育指針」に基づき、担当養育制を取っている。できる限り入所から退所まで担当養育者を変更しないように取り組んでいる。小規模グループケアの運営も有効と考えて実践している
- 小グループに分かれて過ごす時間を持っている。愛着人形を1歳の誕生日に担当からプレゼントしてもらっている

現状と課題

- 個別対応を行うことでの他児に対する職員の少なさ。しわ寄せ
- マンパワー不足で日々の業務をこなすことで精一杯。職員間の協力でなるべく多くの個別活動ができるように努めている
- 小規模グループケアの運営も10年経過して、安定した運営ができている。親密で継続的な関わりにより発達の保障と情緒の安定が図られている。課題は養育の密室化とスタッフの働き方改革（休憩時間等）
- 担当との愛情が深まることをどのような価値観をもってどこまで踏み込んでいいかということが難しい

QUESTION 2
担当としての取り組みは？

工夫していること

- 出勤したらまず初めに声を掛ける。個別対応、食事を一緒に食べる。分散保育のメンバーに必ず担当児を入れる
- 担当児と1対1で関わる時間を作る。担当職員との個別の外出体験など
- できる限り担当の子どもがいる部屋にて勤務をする。出勤時、帰る時などしっかり「あいさつ」をし、スキンシップをはかる。担当の子どもにとって一番安全で安心な場所でいられるように関わっている（気持ちを受け止め、応え、時に見守り、しっかり見つめている事を伝えていけるように努力している）
- 退勤時には「1回ねんねしたら来るね」などと具体的にいつ来るか伝えるようにし、「バイバイタッチ」をして退勤するようにしている。出勤時には「待っててくれてありがとう」と声をかけるようにしている

現状と課題

- 全てのことが確実にできるとは限らない
- 時間の確保が難しく、体調管理や全体での保育に偏ってしまう
- 勤務体制によっては担当の部屋に入れないこともあるのでその時、その後の子どもの気持ちのフォローをしていく必要があるが、現実はできているのか考えてしまう
- 最初は別れ際に泣いていた担当児の姿がこの取り組みによって笑顔でバイバイできるようになった。出勤時にも笑顔でおはようと迎えてくれるようになった
- 職員間の取り組みの一致が難しく、必ず担当のグループにつけるかは未確定

QUESTION 3
親との関わりは？

工夫していること

- 院での報告を確実に行う。面会などに来られない時には手紙を送る
- 親と関わる職員を決めている。主任、FSW、副主任が主となり対応している
- 安全で安心して、笑顔で子どもと関わりを持つことができる環境づくりを心掛けている。関わりの中で本児をかわいいと思える場面を作り、また面会をしたいと思ってもらえるように努力している
- 毎月のお便りで子どもの成長を伝えたり、電話で面会の予定を調整したりしている
- 年2回保護者やOBを招いての行事を行っている

現状と課題

- 親が面会に来られた時久しぶりに会うため、泣いてしまうことがある。職員を泣いて追いかける子どもの姿を見てしまうこともある。そのような姿を見て親が気持ちが離れてしまわないか、面会の足が遠のいてしまわないか心配になる。両親の気持ちに寄り添うことが大切だと思う。どのような声掛けをすべきか？親子が穏やかに面会時間を過ごすためにどのような工夫ができるかを考えることがこれからの課題となる
- 対応に難しい親が多いため、親との関わり、電話対応などはトラブルにならないように注意している
- 現実的に全く面会ができていないケース、面会に来たが子どもに泣かれてしまい、心が折れてしまい足が遠のくケース、愛着関係の形成を目指すにあたり課題はたくさんある
- 年2回の行事では普段都合が合わない保護者の方も来てくださることが多い
- 保護者の方の都合と児童の体調が合わないことがあり、面会が延期になることがある

QUESTION 4
困っていることは？

- 担当児との愛着関係ができている中で、保護者が面会に来られた時に保護者に対し泣いてしまう子がいる。しっかりと職員と子どもの愛着はできているが、最も優先すべきは母子関係であり、泣く子に対して母の気持ちが離れてしまわないか不安である
- 家庭では甘えをすべて受け入れ、泣いていれば時間や周わりを気にせず、抱きしめてあげられるが、集団生活で同じような月齢を少人数で複数人見守ることが多いため、努めてはいるが、1対1で関わる時間を設けることが難しい
- 保護者との面会や外泊が頻繁にあるが、引き取りのめどが立っていない2歳児の心の揺れに関係機関とどのように見解をあわせていくのか
- 発達によって変化する子どもたちの気持ち（愛着の形）に合わせた関わり方や職員の動きを伝えていくのが難しい

アンケートをまとめてみて

今回乳児院版をまとめてみて感じたのはどの施設ももっと担当児童と関わりたいのだけど、時間の制約があり十分に関わりきれていないと思っていることです。そして、担当児童だけでなく、親との関わりについてもどの職員も難しさを感じています。

今回まとめたアンケートは全ての悩みを解決するものではありませんが、考えるきっかけになれば、と思います。アンケートのご協力ありがとうございました。